論　文　要　旨

氏　　名　　大瀬良　知子

論文題目　Relationship of mothers' food preferences and attitudes with children's preferences.
(幼児の好き嫌いに対する母親の好き嫌いと食行動との関連に関する研究)

論文要旨

【目的】幼児期に正しい食習慣を身につけることは重要である。しかし、幼児期には食生活の問題が生じ、その中に「好き嫌い」の問題がある。幼児の家庭での食事を担っているのは主として母親であるが、幼児に好き嫌いがあるとバランスのとれた食事を摂らせることが難しい。そこで、本研究は、幼児の好き嫌いを減らす手掛りとするため、母親の現在および子どもの頃の好き嫌いが幼児の好き嫌いに及ぼす影響の強さについて検討した。さらに、幼児や母親の生活習慣・食習慣も幼児の好き嫌いに影響を与えていると考えられるので、その影響についても調査した。

【方法】神戸市内の私立幼稚園に通園している幼児 244 名の母親を対象とし、アンケート調査を実施した。調査時期は入園、進級直後の 4 月とした。アンケートは、食習慣に関する質問と、母親の現在及び子どもの頃の好き嫌いと幼児の好き嫌い各々の有無とその食品について質問した。解析方法は、多重ロジステック回帰分析を行い、有意水準を 5%とした。

【結果】1. 幼児の好き嫌いと母親の好き嫌いの関連について 幼児の好き嫌いと母親の現在の好き嫌いの有無には有意な関連は見られなかったが、幼児の好き嫌いと母親の子どもの頃の好き嫌いでは有意な関連が認められた（$p<0.05$, Fisher の直接確率法）。また、母親の好き嫌いについて、現在と子どもの頃の間で有意な強い関連が見られた（$p<0.001$）。 2. 幼児と母親の好き嫌いと生活習慣・食習慣について 幼児の好き嫌いの有無と関連がある項目を調べるため、多重ロジステック回帰分析を行った。その結果、幼児の好き嫌いの有無に影響を与える因子は母親の子どもの頃の好き嫌い　(2.64 [1.05-6.60], $P<0.05$ (Odds Ratio [95% confidence intervals], probability))、休日の朝食摂取時刻(2.89 [1.26-6.64], $P<0.05$)、惣菜利用頻度(3.25 [1.28-8.25], $P<0.05$)であった。すなわち、幼児の好き嫌いを増加させる因子として、母親の子どもの頃の好き嫌いがあること、朝食の摂取時刻が遅いこと、惣菜利用頻度が多いことが示された。

【考察】「現在」と「子どもの頃」の母親の好き嫌いを比較すると、本調査では「子どもの頃」の方が幼児の好き嫌いに強い影響を与えていた。人間は本来、好きな味と嫌いな味を持っているので、後天的に補正していく必要がある。その時期が幼児期である。我々の調査では、「子ども

の頃」に好き嫌いがあった母親の子どもは、幼児期に好き嫌いが生じる割合が高い可能性が示された。また、休日の食事摂取方法や惣菜利用の仕方で幼児の好き嫌いの在り方が変わりうることが示唆されたことから、幼児の好き嫌い改善のために、母親の食行動の見直しは有用であるものと考えられた。

【結論】母親の子どもの頃の好き嫌い、母親の食行動・生活習慣は、幼児の好き嫌いに影響を与えていることが示唆された。

【大瀬良 知子氏の博士論文に関して】

ここで、学位論文全文ではなく、要約だけを記載しているのは、主論文の出版社からインターネットでの全文公開が許可されなかったためです。なお、学位論文の閲覧を希望される場合には、所属機関の図書館等から所蔵調査により申込んでください。

申込あて先・・・・・神戸女子大学図書館　相互利用係
FAX：（０７８）７３１－５５６９